日本産業衛生学会
関東地方会ニュース
(題字 高田　勗 筆)

発行所／日本産業衛生学会関東地方会事務局・〒105-8461東京都港区西新橋3-25-8
東京慈恵会医科大学環境保健医学講座内・TEL(03)3433-1111 内 2266・FAX(03)5472-7526・発行責任者／清水　英佑

葉たばこの格付けを行う現場
耕作者立ち会いの下、鑑定員２名が合議し格付けを行っている。粉塵もあるが鑑定員は臭いを確認する作業でもあり、マスクが付けられない。鑑定員の足元には集塵機が設置されている。
(写真提供 原美佳子)

産業・社会構造の変革と産業保健

矢野栄二（帝京大学医学部衛生学公衆衛生学講座）

いつの時代も産業・社会構造の変革はあったが、今日の変革のキーワードは、情報技術、国際基準、消費者主権、そして効率化であろうか。これに対処する医学医療の世界でのキーワードはEBM (Evidence Based Medicine) である。敗戦後の一時期、何の話にも「民主主義」という枕言葉が付いたそうだが、実はひとによりその理解は様々で、まるで逆の非民主主義的な話の枕にすら使われたという。こうしたかつての「民主主義」と、いまの「EBM」は似た状況にある。

医学界を席巻しているEBMは産業保健の分野にも及び、産業保健における EBM=Evidence Based Health Care を唱える声を聞く。しかし、実際にEBMに基づく産業保健を実践したとか、Evidence を作ったという報告はあまりに少ない。少ないだけでなく、総論賛成・各論反対で、EBM を実践しようとすると、かなりの軋轢が生ずることをいくつか経験した。権威や習慣でなく、Evidence に依拠するのが EBM であるということは、現状の中で権威や習慣に依拠する部分と衝突する。

一例を挙げよう。「定期健診項目として尿蛋白検査は有効性の Evidence がなく、国際的にはむしろ実施すべきでないとされている」と、あるとき紹介した。これに対し腎臓の専門家から強い反発が寄せられた。幸いシンポジウムという形で詳しい説明の機会が与えられ、大勢にはご理解をいただいたが、終了間際、「おまえは間違っている」とヒステリックに叫ぶ声があった。彼の論拠は、自分は腎臓の権威であり、何十年と検尿をやってきた、ということに尽きた。

民主主義がそうであったように、EBMもその言葉が頻回に使われている間は、中身が定着していないのであろう。

産業医活動の原点と未来

浜口伝博（日本アイ・ビー・エム）

表題テーマをいただいてから、あらためて日本産業衛生学会の70年史「日本の産業保健」を読み直してみた。産業医活動の原点を探ることは、とりもなおさず日本産業衛生学会の原点とその経緯を辿ることに通じると考えたからである。

日本産業衛生学会における原点とは何か。それは暉峻義等氏をもって産業衛生協議会（本学会の前身）の創設に駆りたて、歴代の先達たちが労苦を厭わず産業医学の知恵と知見を積み重ねたその原動力である。記録によると、学会創設当時の会員はほとんどが官民企業の医師たち（産業医）であり、官庁の医系行政官、その他関係者とのことである。つまり、本学会を立ち上げ突き動かし続けてきたものは、過酷な労働と労働者の健康被害を間近に見続けた医師たちによる改革の意思であり、全国の有志を糾合しともに職業病を撲滅せんとする産業医学者たちの崇高な団結の意思であったように思う。またその解決に向かっては、具体的な解決策を科学的に帰納させながら、一方で国内法としての指示機構を誘導させるもので、成果物の労働現場への還元にこそ最大の価値をおいて来た。

未来においても、産業現場から出発し産業現場に戻る、という産業医の視点原則は決して変わることはないだろう。しかし未来を望診するに、これからの問題がすべて前時代からの経験則上に発生するものばかりでないことは覚悟すべきである。例を挙げれば、近年のＩＴ化進展による労働態様激変に伴う事態がすでにあり、経済環境も含めた急激なグローバライゼーションへのシフト要求、遺伝子情報まで含めてしまいかねない健康情報管理などがある。視点は、労働そのものから労働を取り囲む「人事制度」「社会システム」「経済環境」へも亘る必要に迫られている。法遵守の基本はそのままに、産業医は企業組織の中にあって産業保健を包含した視野を持つ経営戦略の一部を担う人材を目指すべきである。

荒木葉子（ＮＴＴ東日本 首都圏健康管理センタ）

人間の身体を総合的に診ることのできる科として内科を専攻し、幹細胞や血液凝固の不思議さに惹かれて血液内科を専攻した。血管内皮がどのように炎症や血栓形成に関わるのかが知りたくて、米国ではひたすら蛋白の精製やジーン・フィッシングに関わった。私自身の原点は臨床医学と科学的なアプローチにある。

産業保健の面白さは、社会の動きと連動していてより人間くさいこと、また、ある程度まとまった集団に長期関われることである。人生 80 年の内、働くのは 20~60 歳とほぼ半分を占める。「健康で、楽しく、長く」働くことは少子高齢化時代には必須の条件になってくるだろう。未病の状態でキャッチし、強力に介入することでその後の重大な傷害や疾病が予防できるなら、労働経済、医療経済にとってメリットは大きい。また、健康診断システムを更に効果的に活用することにより、個人や組織因子の何が人を健康や病気にするのかという解析が可能となる。コホート研究の少ない我が国において、職場の健康情報の集積は宝物と成り得る。

産業保健の原点は健康教育である、と私個人は思っている。産業医学の専門家として医学、法律、経済について正しい最新の知識を提供するのは当然であるが、必要な知識量と速度は年々増すばかりである。ともかく自立力、自己決定力の育成が重要であり、安全、衛生両者の予防的アプローチ法を労働者に徹底的に植え付ける必要性がある。自分の健康に対する積極さはキャリア形成の積極さに結びつき、ひいては組織の健康に繋がっていく。とはいえ、産業現場では健康障害因子が特定されても、個人の力では如何ともし難い事が多々あり、産業保健職は、経済効率に押しつぶされそうな労働者の健康を守り抜くために、より強い権限を付与されるべきだと考えている。

産業医活動の原点と未来

桝元　武（三菱化学鹿島事業所）

私が最近痛感しているのは、産業医活動において時間軸を意識することの重要性である。

たとえば健康管理においては、最近は様々な健康予測システムが開発され、現時点の健康診断データからその人の健康状態の将来像を予測して自らの健康管理意識を高めることに役立っており、その出来映えと完成度にも実に感心させられる。しかし、その人がどういう部所でどういう責任を負わせられているか、そしてそれがどう変化していくかまではこうしたシステムでは把握しきれない。近未来的に撤退することがわかっていて残務整理に忙しい部所と、逆に業績が好調で同様に大忙しである部所とでは、拘束時間が同程度であっても心身の健康への影響は大きく異なってくるだろうし、そうした社内的な情報はやはり産業医でなければ収集できず、健康相談にも反映できない。

同様に職場巡視でも、現場の断面像をチェックして改善点を指摘することは労働衛生に関するトレーニングを受けて経験を積んだ腕利きの衛生管理者がいれば、いささか極論であるが必ずしも産業医などは必要ではないように感じることもある。しかしその作業環境でその作業を継続していて将来的にどういう健康影響があり得るかを考えることは他の職種の方にやってもらうわけにはいかず、産業医として責任を持って遂行しなければならない重要な責務である。

社員の健康状態も作業現場でも、その断面を取り上げていろんな知識を振り回してあれこれ言うのは簡単であり楽であるが、産業医がそのレベルにとどまっていては未来につながる貢献は出来ないと思う。人も現場も生きていて常に移り変わっていることを忘れず、現在とその先までも視点に入れて産業医活動を続けたいと思っている。

廣　尚典（ＮＫＫ鶴見健康センター）

私の産業医活動はいわゆる提案型などからは程遠く、職場から持ち込まれるニーズに背中を押されながら右往左往している毎日であるが、それでも課題のひとつひとつに取り組むにあたって、自分なりに大切にしてきたことがある。そのひとつは「産業保健の視座」である。

私にとっての「産業保健の視座」とは如何なるものかを簡潔に説明しようとすると、なかなか難しいのであるが、人（労働者）とその健康を職場集団や仕事の関係の中でとらえること、個人と職場の両面に目配りをすること、健康を包括的に評価することなどが、その構成要素としてあげられる。

産業保健に足を踏み入れた当時からメンタルヘルスの分野に興味を持ち、ささやかな研究や発言もしてきたが、特にここ7、8年は、そうした点を意識してきたつもりである。メンタルヘルス対策を産業保健活動全体の中でどのように位置づけるか、メンタルヘルス対策における産業医の役割、真骨頂をどこに求めるか…。

最近、「○○科産業医」という表現を耳にする。○○科には、臨床各科の名称が入る。内科産業医、精神科産業医といった具合である。これには、ひどく違和感を覚える。その臨床科の評価や問題解決の方法論を、そのまま産業保健活動に持ち込むといったような語感があるからだ。産業保健は、人（労働者）と仕事を適合させることを主な目的としているが、これは臨床各科の専門医が役割分担をして各々の専門の立場から精緻な健康管理をすることだけで容易に達成されるものではないであろう。

産業保健の対象とするところは様変わりを続けており、今後も少なからず変化をしていくのであろうが、「産業保健の視座」が維持されていれば、産業保健スタッフの存在意義はそうたやすくは揺るがないと思う。

産業看護活動の原点と未来

河野啓子（東海大学健康科学部）

急速な技術革新の進展、産業のグローバル化、労働力の変化、勤務形態および就業形態の変化など、目まぐるしい職場環境の変化により、働く人びとの心身の健康はおかされやすくなっている。このような状況下では、労働と健康の調和をめざした、そしてまた相手を全人的に捉え気持ちや生きがいを尊重した、きめこまやかな心のふれあいのある健康支援活動が特に必要とされる。これらは産業看護活動の中核ともいえるものであることから、産業看護に対する期待は年毎に高まりをみせている。

これらの期待に応え、よりよい産業看護活動を行うためには、以下の五つについての更なる努力が求められよう。

① 社員とのラポールをとることとバックグラウンド情報を多く収集すること

産業看護職は、ファーストラインプロフェッショナルとして社員の身近にあることを活かし、社員との話し合いの場をなるべく多く持つ。

② 管理監督者とのパイプを太くすること

健康診断の事後措置、職場巡視、管理監督者教育などのあらゆる機会を活用し、管理監督者との情報交換を行う。

③ トップマネジメントの理解を得ること

健康が企業経営にとって、いかにメリットをもたらすかについての情報提供を行う。

④ 産業保健チームでうまく協働すること

チームメンバーのそれぞれの専門性、立場、業務内容を認めあい、情報交換を密にする。

⑤ 実力アップを図ること

社内、社外の研修会に積極的に参加する。

第 215 回例会報告

中館俊夫（昭和大医）

第215回例会は、平成13年12月8日（土）昭和大学上條講堂にて開催された。当日は会員141名、非会員34名の参加を得て、まず一般演題として、広義の健康管理に関する 4 題の発表（産業衛生学雑誌に要旨掲載）があり、続いて教育講演として「職場における呼吸器疾患の管理」と題して東京女子医大教授の永井厚志先生に、喫煙との関連が深い慢性閉塞性肺疾患を中心にお話しいただいた。休憩の後、4 月から実施されたばかりの二次健康診断・特定保健指導の労災保険による給付事業をめぐってシンポジウムが行われた。労働福祉事業団医監の高田勗先生を筆頭に、企業、健診機関、大学を代表して4人の演者（山門實、三宅仁、相澤好治）の報告と、地域医師会、看護職の方からの指定発言を基に、制度の概要、現状と課題、今後の展望について、実りある討論がなされた。

第 216 回例会報告

八上享司（東京簡易保険会館健診センター）

第216回例会は、1月19日（土）ゆうぽうとホールで行われ、参加者500名を越す盛会となった。学会講演は時宜を得た職場メンタルヘルス問題の内容であった。厚生労働省は「最近における業務上の心身の負担増大に対応した労働衛生対策の推進」を取上げており、東京労働局の稲垣稔課長にわかりやすく解説して頂いた。職場のストレス関連問題に対処するには〝行動的技法〟がある。危機管理問題も日本はまだ意識が低く、潜在する危険性の体系的な事前評価、つまりリスクアセスメントが充分でない。産業医が危機介入を積極的に行うべきと小西聖子

先生は述べられた。下光輝一先生には職業性ストレス簡易調査表を用いた実地的評価について、井上令一先生には職場における軽症うつが多く産業医・保健師などの早急な対応行動について、松崎一葉先生には宇宙ステーションに向かっての宇宙飛行士と関連先端技術産業の人々のメンタルヘルスについての一歩進んだ内容のお話を頂いた。さらに毛利氏の撮影された地球の美しいビデオに深く感動した。当日の座長をはじめ多くの方々のご支援に感謝する。

第 217 回例会報告

横山和仁（東大院医）

第217回例会は、6月1日（土）東京大学山上会館で開催された。拡大幹事会・平成14年度総会後、13時10分から開始された本例会では、地方会長挨拶につづき、特別講演会「変貌する産業社会と我々の課題」が催された。この特別講演会では、①産業保健の現状－行政の立場から（上田博三厚生労働省労働衛生課長）、②産業保健の研究戦略－日本における優先研究課題と推進戦略について（荒記俊一産業医学総合研究所理事長）、③健康障害要因のリスクアセスメント－産業保健の現場から（城戸尚治ソニー株式会社産業医）の3講演が行われた。次いで、招待講演「環境と倫理－グローバル化する産業活動に対応して」（大井玄国立環境研究所参与）が行われた。その後、一般演題5題が報告され、18時30分に閉会した。当日は盛況で、入室できなかった参加者は、ロビーに設置したモニターに熱心に見入っていた。開催にあたり、ご指導・ご協力を賜った清水英佑地方会長、鈴木勇司幹事、座長・講師各先生、教室員各位、および産業医学総合研究所有志に感謝申し上げる。

第１回産業看護部会産業保健研修会報告

村仲良子(ＵＦＪ銀行)

平成13年度より産業看護研究会は発展的解消をし、関東地方会産業看護部会として新たな出発をした。新組織での第1回産業保健研修会は、他職種の参加も頂き平成14年1月12日（土）東京女子医科大学において開催された。

メインテーマは「産業保健の場におけるケアコーディネーション」で50名の参加があった。午前は加藤登紀子部会長の挨拶に続き、「ケアコーディネーションの基本とその展開」というテーマで畑江千穂先生（ＨＲテクノス）による講演が行われた。午後は清水英佑地方会長の挨拶に続き、「ケアコーディネーションの実際とチームアプローチ」というテーマで野中猛先生（日本福祉大学）による講演があり、その後事例を時系列に紹介し、評価について参加型の会であった。いずれも具体的・実践的内容であり、産業看護職のコーディネートの重要性を再認識した。

第１回産業衛生技術部会研修会報告

伊藤昭好（労研）

平成13年度に立ち上げた関東地方会産業衛生技術部会の第一歩となる研修会を1月26日（土）早稲田大学理工学部57号館において13：30～17：00に開催した。ねらいは、産業衛生技術専門職に必要なコンピーテンスを討議することにあった。当日は、中明賢二部会長（麻布大）の司会で、3名の演者から問題提起にあたる講演を行い、全体討論へと進む形で実施された。演者と演題は、①田中茂（北里大）「産業保健技術専門職と大学教育の現状」、②伊藤昭好（労研）「産業保健専門職の生涯教育ガイドラインについて」、③岸田孝弥（高崎経済大）「日本人間工学会の認定人間工学専門家について」であっ

た。研修会参加者は20数名と多くはなかったが，非常に熱心な討議が行われ、今後、部会が果たしていく課題がより鮮明となった。

地方会総会報告

鈴木勇司（慈恵医大）

場　所：東京大学山上会館
日　時：平成14年6月1日

1. 議長として小林廉毅教授（東京大院医）が選出された。
2. 平成13年度事業報告・決算報告について
   (1) 事業報告（案）が承認された。
   (2) 会計監査報告が5月21日に和田攻監事と田村静夫監事により監査が行われ、適切な会計処理がなされていることが田村静夫監事より報告された。
   (3) 決算報告（案）が承認された。
3. 平成14年度事業計画（案）・予算（案）について
   (1) 事業計画（案）が承認された。
   (2) 予算（案）が承認された。

理事会報告

清水英佑（慈恵医大）

日　時：平成14年2月23日および6月8日

1. 新役員（任期は平成14年度から16年度まで）は以下の通りである。
   〔理事長〕藤木幸雄、〔副理事長〕相澤好治
   〔理事〕岸玲子・斎藤和雄・佐藤洋・角田文男・大前和幸・河野啓子・小木和孝・清水英佑・中明賢二・能川浩二・野崎貞彦・浜口伝博・藤田雄三・日下幸則・佐藤章夫・井谷徹・斉藤政彦・竹内康浩・植本寿満枝・圓藤吟史・岡田章・吉良尚平・芳原達也・甲田茂樹・実成文彦・伊規須英輝・田中勇武・二塚信、〔監事〕大本美彌子・高田勗
   〔地方会長〕北海道・岸玲子、東北・角田文男、関東・清水英佑、北陸甲信越・佐藤章夫、東海・井谷徹、近畿・堀口俊一、中国・吉良尚平、四国・実成文彦、九州・二塚信
2. 功労賞は、名誉会員・現役員・現職者を受賞対象より除くことが了承され、その結果、飯田英男・池田正之・岩井淳・奥井幸子・木村菊二・輿重治・酒井淳・坂本弘・高田和美・原一郎・森本基の各氏が推薦された。
3. 労働衛生関連法制度検討委員会委員：平田衛・原日規章・甲田茂樹・宮上浩史・上田厚・堀江正知・三柴丈典・矢野栄二・中明賢二・井谷徹。
4. 編集委員会委員：小泉昭夫（委員長）・佐田文宏・川田智之・吉田勝美・小野雄一郎・那須民江・日下幸則・竹下達也・川上憲人・山田誠二・森田学・本橋豊・奥野勉・武林亨・圓藤陽子・西條清史・甲田茂樹・高橋謙・八幡勝也・保利一・錦戸典子。
5. 許容濃度等に関する委員会委員：竹内康浩・佐藤章夫・中明賢二・三角順一・友国勝麿・河合俊夫・岸玲子・矢野栄二・圓藤陽子・佐藤洋・圓藤吟史・大前和幸・小泉昭夫・日下幸則・花岡知之・東敏昭・川本俊弘・高橋謙。
6. 厚生労働省衛生課は、「健康手帳」の作成を検討しているため、非常設委員会を設置し検討していくことにした。
7. ICOH2009推進委員会準備会第３回委員会を開き、開催候補地を福岡とした。
8. 厚生労働科学研究費補助金研究課題に平成14年度より労働安全衛生の分野が新設された。
9. VDT作業について厚生労働省より最終指針案がだされた。
10. 第12回産業医・産業看護全国協議会は、平成14年10月25･26日（企画運営委員長・小山和作）に開催する。
11. 第13回産業医・産業看護全国協議会は静岡県浜松市で平成15年10月17･18日（鎌田企画運営委員長）に開催する。

幹事会報告

鈴木勇司（慈恵医大）

1. 地方会新役員（任期は平成14年度から16年度まで）は以下の通りである。
   〔地方会長〕清水英佑
   〔幹事〕鈴木勇司（幹事長・事務局）・市川正明・伊藤昭好・伊藤岩美・稲垣弘文・今井常彦・岩間章介・宇佐見隆廣・内田健夫・内山寛子・大道正

義・沖野哲郎・柏崎研・加地正伸・加藤登紀子・川田智之・岸田孝弥・小峰慎吾・下光輝一・神保恵子・須藤英仁・諏訪園靖・高橋英孝・武田桂子・武林亨・千葉百子・照屋浩司・中尾睦宏・新津谷真人・平田衛・廣尚典・桝元武・松崎一葉・松田敏裕・三宅健夫・宮本俊明・三好裕司・森晃爾・八上享司・柳澤裕之・山内博・山村邦男・横山和仁・渡辺哲

〔監事〕埋忠洋一・和田攻

2. 第219回例会（加地当番幹事）は、平成14年12月7日（土）東京慈恵会医科大学中央講堂において開催予定。特別講演「産業医学と航空医学のかかわり」（飛鳥田一朗）、教育講演　1）「VDT作業者の健康管理―VDT作業における労働衛生管理のためのガイドラインの解説―」（野田一雄）、2）「海外勤務者のマラリア予防対策」（大友弘士）、3）「産業医が知っておきたい心肺蘇生法―除細動器（AED）の普及について―」（大越裕文）。

3. 第220回例会（中尾当番幹事）は、平成15年2月に帝京大学にて開催予定。平成15年度一泊例会・見学会（松崎当番幹事）は、筑波大学にて開催予定（期日未定）。

4. 産業保健学事典（仮称）を関東地方会の監修のもと、平成16年2月に刊行することとなった。

5. 関東地方会産業医部会の新会長に三好裕司幹事が就任した。

6. 関東地方会産業看護部会の新会長に神保恵子幹事、新副会長に武田桂子幹事が就任した。

7. 第48回労働衛生史研究会（相澤好治会長）は、平成14年10月5日（土）北里大学薬学部（白金キャンパス）1号館大講義室にて開催予定。教育講演「日本の労働衛生史と産業医活動」（野村茂）、「じん肺X線写真分類の80年史」（細田裕）、「過労死労災認定の歴史的理解（仮題）」（石井義脩）、シンポジウム「未来に役立つ労働衛生史」1)産業医の立場から（石渡弘一）、2)産業看護の立場から（河野啓子）、3)産業衛生技術の立場から（中明賢二）、4)医学教育の立場から（新村拓）

◆◆◆

おめでとうございます

日本産業衛生学会名誉会員
　皆川洋二 先生（労働衛生コンサルタント）
日本産業衛生学会功労賞
　木村菊二 先生（労働科学研究所）
　輿　重治 先生（中央労働災害防止協会）
　森本　基 先生（日本大学）
日本産業衛生学会学会賞
　荒木俊一 先生（産業医学総合研究所）
日本産業衛生学会奨励賞
　浜口伝博 先生（日本アイ・ビー・エム）

ありがとうございました

平成11年4月より平成14年3月までの3年間、関東地方会選出理事、地方会幹事および監事で、この度退任されたのは以下の方々です。

地方会発展のためご尽力下さりありがとうございました。ここにお名前を掲載し、御礼とさせていただきます。

地方会長　清水英佑

≪ 関東地方会選出理事 ≫

荒記俊一、櫻井治彦、横山英世

≪ 地方会幹事 ≫

安達修一、有藤平八郎、磯貝浩章、
上野美智子、埋忠洋一、大久保靖司、
大前和幸、小川康恭、金子顕雄、
鎌田登志子、川上早苗、黒澤栄子、
鈴木正夫、土谷博之、角田透、
中館俊夫、中村磐男、野上寛一、
羽生田俊、平野英男、細貝浩章、
堀江正知、村上正孝、村田勝敬、
山野優子、山村恵彦

≪ 地方会監事 ≫

田村静夫

（五十音順・敬称略）

研究室紹介

埼玉医科大学衛生学教室

和田　攻

埼玉医科大学は、秩父山麓の風光明媚な場所にあり、四季を通じて自然を楽しむことが出来ます。現在，衛生学教室は教員5名(教授1名、助教授1名、講師1名、助手２名)、非常勤講師５名，ポストドク１名、大学院生１名、実験助手２名(計14名)で教室の運営、教育、研究に従事しております。

産業保健や中毒学の分野では、厚生労働省や他の省庁の委員(長)を務め、社会的な問題になっておりますダイオキシンの文献的疫学調査、環境中の有害な化学物質のリスクアセスメントと提言、じん肺症における発癌のリスクアセスメント、過労死の定義の明確化と補償の明瞭化などのテーマに積極的に取り組み社会貢献に務めております。また、本年度より、地域の医師会だけでなく埼玉医科大学でも産業医認定講習会が開催されるようになり、地域の医師会や産業保健推進センターと連携し合いながら産業医の育成に精力的に取り組んでおります。

教室ではその他に、重金属(特に水銀)の毒性の発現及び進展の機序、必須微量元素であり機能性栄養素でもある亜鉛の生体における役割と生体への影響(特に、血圧や腎機能、アポトーシスに及ぼす影響とその機序に関する研究)、光生体計測による疾患の早期診断を目指した医療光学機器の開発などの研究を行っております。

21世紀は、産業構造の変化に伴い、職場の健康管理や保健指導、衛生教育などが更に重要な課題になると考えられます。今後も産業衛生学会の発展のために全力を尽くし、社会に貢献できるような研究をしていきたいと考えております。

http://www.saitama-med.ac.jp/sms/index.html

産業保健実践活動報告(第５回)

マネジメントシステムによる産業保健活動

森　晃爾（エクソンモービル）

私がエッソ石油に入社して10年になりますが、その間に会社は段階的な業務提携や合併によって、業務の幅も組織も複雑になってきています。現在、ExxonMobilグループ全体（エクソンモービルと東燃ゼネラル石油を中心としたグループ）の産業保健サービスを専門的に提供する“医務産業衛生部”という組織には、地理的な３つのグループ（東京、神奈川、関西）が存在し、専門スタッフとして産業医、看護職、インダストリアルハイジニストが、グループの各事業所で直接サービスを提供しています。すなわち、例えば川崎や堺にある工場であっても、そこでサービスを提供する産業保健スタッフは、工場の所属ではなく、医務産業衛生部の所属ということになっています。

現在各部門では、地域の事情を考慮しながらも世界中で一定レベルのサービスを展開することを目指しており、このことは私たちの医務産業衛生部も同じです。そのためには、共通であるべき部分は標準化して実施する必要があります。標準化は、一見マニュアルに沿った単純作業にも聞こえますが、リスクアセスメント戦略や判断については、かなり高い専門性が必要とされます。

本来このような活動は、産業保健部門単独の業務ではなく、事業者の責務として、各部門を巻き込んで実施されるべきものです。標準化およびトップのリーダシップと各部門を巻き込んだ産業保健活動を実現するためのツールとして、マネジメントシステムがあります。ExxonMobilでは、安全・健康・環境に配慮した完璧な操業のためのマネジメントシステム（OIMS）が存在し、内部評価と外部評価を繰り返しながらシステムの完成度を高めています。産業保健についてもそのサブシステムとして位置づけられており、各専門職が、マネジメントシステムの中での役割を明確にしながら、産業保健活動の向上に務めています。

関連学会・研究会開催予定

第218回関東地方会例会（一泊例会）・第46回見学会
日時：平成14年9月13日（金）～14日（土）
例会会場：ニューミヤコホテル（足利市）
見学会：アキレス
企画運営委員長：松井寿夫（獨協医科大学・衛生学教授）
当番幹事：宇佐見隆廣（獨協医科大学・公衆衛生学）

第6回産業衛生技術部会大会
日時：平成14年10月23日（水）
会場：福岡国際センター（全国産業安全衛生大会・緑十字展示会場内）
実行委員長：保利一（九州地方会幹事：産業医科大学）

第12回日本産業衛生学会産業医・産業看護全国協議会
日時：平成14年10月25（金）～26日（土）
会場：熊本市産業文化会館
実行委員長：小山和作（日赤熊本健康管理センター所長）

第1回産業衛生技術セミナー
日時：平成14年11月22日（金）10：00 ～ 17：00
会場：東京ビックサイト（有明・東京国際展示場、全日本科学機器展示会場内）
主催：産業衛生技術部会

第2回産業保健研修会
テーマ：「グループワーク」
日時：平成14年11月30日（土）10：00 ～ 16：30
会場：ウィメンズプラザ（渋谷区青山）予定
主催：産業看護部会

第219回関東地方会例会
日時：平成14年12月7日（土）
会場：東京慈恵会医科大学中央講堂
当番幹事：加地正伸（日本航空健康管理室）

編集委員名簿

◎伊藤岩美（環境デザイン研）、稲垣弘文（日本医大）、宇佐見隆廣（獨協医大）、沖野哲郎（三菱マテリアル桶川製作所）、川田智之（群大医）、川名ヤヨ子（柏戸記念財団）、小峰慎吾（NTT東日本千葉健管セ）、○鈴木勇司（慈恵医大）、諏訪園靖（千葉大院医）、田中三千代（NTT東日本埼玉健管セ）、久内徹（シャープAVシステム事業本部）、原美佳子（JTコーポレートサービス部）、廣尚典（NKK鶴見保健セ）、桝元武（三菱化学鹿島事業所）、宮本俊明（新日鐵君津製鐵所）、山野優子（昭和大医）
◎　編集委員長　○事務局

編集後記

編集後記がとうとう回って来ました。平成9年に専属産業医となって6年目となります。産業保健のなんたるかを知らないうちから、地方会ニュースの編集に参加させていただきました。お恥ずかしい限りですが、諸先輩方のご支援で続けられました。

表紙の写真の選定から、トリミング、執筆者の選考（編集の先生方の人脈の広さに驚きは隠せません）、投稿文の校正など多くの作業がありました。そして船頭多くして何とやらと申しますが、期日までにはちゃんとした形にできあがって行きます。何もないところから、形になり、会員の先生方にお配りできる楽しさは、筆舌に変えられないことです。

ところで、私が専属産業医になって感じたことは、臨床と違い産業保健のスタッフは医師も含め、孤立した組織になりがちなことです。そこで、この地方会ニュースがネットワーク作りの一助になればと考えております。現場での奮闘記などのご投稿をお待ちしています。（原）

本年4月看護部会から編集委員に加えて頂いた新人編集委員です。コンダクター伊藤委員長の下、6号スケルトンが完成度を上げてゆく過程は心地良い経験でした。この紙面を通して元気が伝わり「心に誠実を刻み」「共に希望を語り合える」そんなお手伝いができればと思います。

実は、日本初の福祉文化新聞「ハッピーちば」の『楽年宣言』にいたく感動を憶えて、“らくらく元気術”の連載を今も手がけています。経験した事のない超高齢化社会を目前にして、人生で一番楽しい時を過ごす『楽年』に向け、働き方や生きがい等発想の転換が必要です。楽年を元気に、生き生き過ごすために、さて産業看護職に何が出来るだろうか？そんな視点からも地方会ニュースの活字が刺激になり、交流の輪が「産業保健の原点と未来」から漕ぎ出せると嬉しく思います。（川名）

第６１回全国産業安全衛生大会のご案内

開催期間　：　平成14年10月23日（水）～ 25日（金）

開催場所　：　マリンメッセ福岡等（福岡市）

中央労働災害防止協会が主催する本年度の全国産業安全衛生大会は、10月23日（水）から25日（金）までの3日間、福岡市において開催されます。

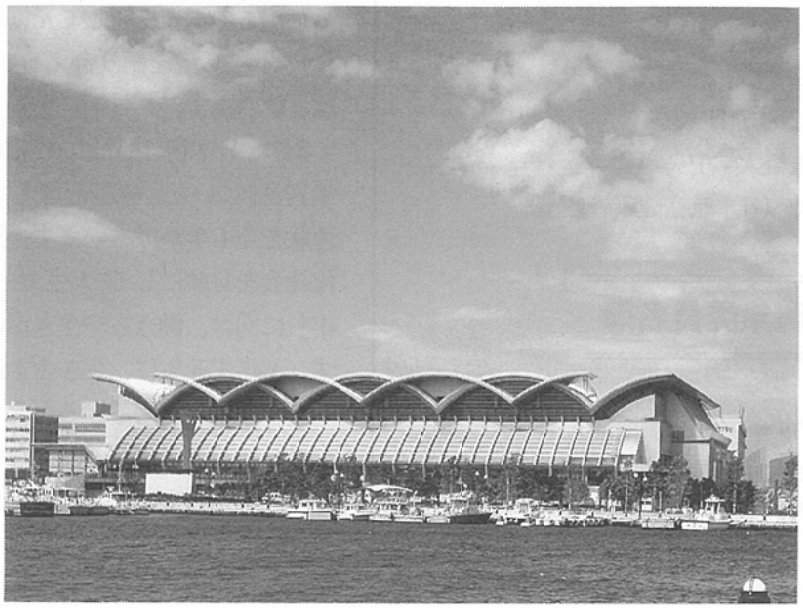
1日目は、マリンメッセ福岡において、開会式、表彰式、厚生労働省労働基準局長の講演、作家　五木寛之氏による特別講演が予定されています。

2日目、3日目は、テーマ別に14分科会を設け、福岡市内各会場において、全国の事業場等の安全衛生改善事例や研究の発表をはじめ、講演、シンポジウムなど最新の情報を取り入れた多彩なプログラムが企画されております。

＊大会の構成

集会、分科会名		日　程	会　　場
総合集会		10/23	マリンメッセ福岡
安全衛生部会	マネジメントシステム	10/24,25	アクロス福岡シンフォニーホール
	中小企業	10/24	福岡銀行本店大ホール
	第三次産業	10/25	福岡銀行本店大ホール
	ゼロ災運動	10/24	メルパルクホール
	ＲＳＴ	10/25	パピヨン２４ガスホール
	国際	10/24	少年科学文化会館ホール
産業安全専門部会	安全管理活動	10/24,25	福岡市民会館
	機械・設備等の安全	10/24,25	都久志会館
	ヒューマンファクター	10/24,25	アクロス福岡イベントホール
	交通安全	10/25	メルパルクホール
労働衛生専門部会	労働衛生管理活動	10/24,25	電気ホール
	健康づくり	10/24	福岡サンパレスホール
	メンタルヘルス	10/25	福岡サンパレスホール
	化学物質管理	10/24	パピヨン２４ガスホール

＊参　加　費　：　一　　般　　1名　12,500円

：　賛助会員　　1口につき1名　6,200円

＊お問合せ先　：　中央労働災害防止協会　教育部企画課ＴＥＬ　03-3452-6402　　（市川正明記）